

(そのとき、イエスはファリサイ派の人々に言われた)

16:19 「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。

16:20 この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、

16:21 その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。

16:22 やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。

16:23 そして、金持ちは陰府（よみ）でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。

16:24 そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』

16:25 しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。』

16:26 そればかりか、わたしたちとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ることもできない。』

16:27 金持ちは言った。『父よ、ではお願いします。わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。』

16:28 わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』

16:29 しかし、アブラハムは言った。『お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』

16:30 金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう。』

16:31 アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』』

年間第 26 主日 9 月第 5 週説教 2013.9.29

金持ちとラザロ

ルカ 16 章 19-31 節

聖書のたとえ話に名前がでてくるのはめずらしいことです。まして無名の人
の名前が出てくるのはきょうのテキストだけです。

ラザロという名は新約聖書に二回でてきます。このたとえ話とヨハネ福音書
11・12 章のラザロ「生き返りのラザロ」です。両者は同姓同名で同じ人物で
はないといわれています。

実名がでてくることを根拠に、これはたとえ話ではない、実際に天国地獄と
はこういうもの、金持ちは地獄行きとという解釈もありますが、たとえ話は
あくまでたとえとして受け取るべきで、これを実話とするのはトンデモ解釈
の類だとされて退けられています。また「いま苦しんでいるが、我慢すれば
天国に入る」というラザロに注目する解釈もあります。このような見方は貧
富の差を認めるものだとたびたび批判されてきました。

「貧乏ならば天国、金持ちは地獄行き」というトンデモ実話風解釈も、「い
まはジッと我慢の子」解釈もそれはそれで多くの人、金持ちでない人には耳
障りのいい解釈なので人気があったのでしょう。

さて、このたとえ話はオリジナルがあるといわれています。古くはエジプト
の民話「死者の国への旅行」、それがイスラエルに伝わり「律法学者と徴税
人」になったと資料研究の成果があります。きょうのテキストはそのイスラ
エル版をイエスがアレンジして語ったというのです。いろいろな解釈ができ
るこのたとえ話の解釈の幅を限定する有用な研究成果だと私はおもいます。
きょうのテキストは前半 19-23 節、後半 24-31 節にわかれています。また
テキストに先行する記事が 16 章 14-15 節になります。

<先行>

金に執着するファリサイ派の人々が、この一部始終を聞いて、イエスをあざ笑った。そこ

で、イエスは言われた。「あなたたちは人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなたたちの心をご存じである。人に尊ばれるものは、神には忌み嫌われるものだ」16:14 -15

<前半>

これに続いて

「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた」16:19

たとえ話前半が始まります。先行するテキストから解ることは、このたとえは「金に執着するファリサイ派の人々」に対しての話だということです。たとえの中ではラザロは実名はでていないけれど脇役あつかいです。じっさいテキスト上ではラザロは何も語っていません。また積極的に何かをしたということもありません。金持ちの門前で横たわり、死んで天使たちにアブラハムのそばに連れて行かれて宴会の席にいた、とあるだけです。

そして、金持ちは陰府（よみ）でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。16:23

前半をまとめると生前と死後の金持ちとラザロの対比、そして、この世とあの世での立場の逆転が語られます。

<後半>

そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』16:24

後半はいきなり金持ちの訴えのシーンに切り替わります。訴えは3回おこなわれ、相手のアブラハムは3回とも拒否します。

(1) 舌を浸す水をください。

⇒お前は生きていた間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。

(2) 実家にラザロを遣わしてください。

⇒お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。

(3) 死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう。

⇒死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。(＊
1)

金持ちも最初は自分に関する訴えですが、2回目からは兄弟のための訴えに変わっています。訴えはことごとく退けられ、金持ちの願いは聞き入れられず、救いはまったく与えられません。ここで突然、テキストは終わります。しり切れトンボになっています。

このたとえの元になったオリジナルの話では後半に探求者(求道者)が登場します。あの世にいて、天国地獄をつぶさに見て、現実の世界で報告、勧告するという役回りが探求者です。この役回りがイエスのたとえには欠けています。「しり切れ」の印象が残るのはそのせいでしょう。そうなると解釈がこの探求者のかわりとしてこのたとえの意味、教えを説きます。

- 1.<金持ちに対して> 金持ちは憐れみの心を持って貧しい人を助けるように(さもないと地獄に落ちるぞ)
- 2.<貧乏人に対して> あなたもラザロのようにいまの苦境に落胆せず祈り続けるように(死後は天国が待っている)
- 3.<すべての人に対して> 死後の世界に備えて教会の教えに聴き従うように(真の救いは教会の教えにある)

などなど。

聖書には、イエスのたとえには死後の世界の探求者、解釈者は登場しません。なぜか。「しかしわたしはあなたがたに言う。このたとえの意味はこうである」この一文ではじまるたとえのイエスの解釈はきょうのテキストにはありません。なぜか？

ここで犬にできものを舐められるラザロはイエスであるといったらいいすぎでしょうか。冒頭でふれたようにイエスのたとえ話の中で無名の名があげられるのはラザロだけです。「ラザロ」は「神は助ける」という意味の名前です。イエスがこの「ラザロ=神は助ける」という名を用いたとき、誰を念頭においてこのたとえを語っているのでしょうか。イエスはこのたとえで人間として扱われないラザロの悲惨な状況を描いています。それはイスラエルの民から見捨てられ、十字架上の処刑という最も卑しい姿で民の外に放棄されるイエスの事実と重ねることができます。イエスは受難の前に、死後の世界を舞台としたこのたとえを用いて、ご自身の来るべき十字架の死と、それに続く復活の栄光を語っているのではないのでしょうか。それがこのたとえの意味としてイエスは言わずして語っているのではないのでしょうか。

イエスが自分たちを義人とするファリサイ派に対して語った言葉は、ラザロを自分にたとえて、つまり「ラザロをイエスとして」聞くときにこのたとえの真の意味が輝やきだします。

(短い祈り) 自由に用いる

全能の神よ、きょう聞いたみことばを心に深く植え込み、み恵みによって行いの実を結び、み名の栄光をあらわすことができますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン

* 1 31節の死者の中から生き返る者が語りかけても、モーセと預言者に耳を傾けない者(=イスラエル)は悔い改めないであろう、一見、復活の主イエス・キリストと矛盾する言葉も、このような解釈で読めば、イエスの言葉として理解できます。